2013年（第24回）福岡アジア文化賞大賞

中村 哲 氏の功績

2013年（第24回）福岡アジア文化賞大賞受賞者 中村 哲氏が、
12月４日にご逝去されました。

長年にわたりパキスタンやアフガニスタンで、
医療や開拓・民生支援の活動を続け、
国際協力を実践してきた中村 哲氏。

福岡で生まれ育ち、市内の中学校・高校・大学で学ばれるなど、
福岡市にも大変ゆかりのある方でした。

また、2013年の受賞時には、市民フォーラムや学校訪問を行い、
たくさんの市民の皆さんとも交流されました。

中村 哲氏が残した数々のご功績を偲び、特別展を開催します。

福岡アジア文化賞
FUKUOKA PRIZE

2013年（第24回）福岡アジア文化賞 大賞

中村 哲
NAKAMURA Tetsu

日本／異文化理解・国際（民際）協力
医師
PMS（ピース・ジャパン・メディカルサービス）総院長
ペシャワール会現地代表

中村哲氏は、パキスタンとアフガニスタンで、30 年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続けてきた。
現地での経験に基づく深い思索と発言・著作は、異文化の理解と尊重を求め、真の平和構築を目指す知的営為として、国際的に高く評価されている。

経歴

1946	福岡県生まれ
1973	九州大学卒業(医学部)
1973-75	国立肥前療養所
1975-80	大牟田労災病院
1982	神経病学専門医
1984	英国リバプール熱帯医学校 熱帯医学専門医(DTM&H)
1984-94	ペシャワール※・ミッション病院ハンセン病棟医長(パキスタン)
1984-	ペシャワール会現地代表
1986-98	JAMS(ジャパン・アフガン・メディカルサービス)顧問(パキスタン、アフガニスタン)
1998-2002	PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)院長
2002-	PMS総院長

※現地発音ではペシャーワル

主な受賞歴

1988	外務大臣表彰(外務省)
1992	毎日国際交流賞(毎日新聞)
1993	西日本文化賞(西日本新聞)
1996	読売医療功労賞(読売新聞)　厚生大臣賞(厚生省)
1998	朝日社会福祉賞(朝日新聞)
2003	マグサイサイ賞「平和と国際理解部門」
2009	農業農村工学会賞(旧 農業土木学会)
2010	アフガニスタン国会下院 表彰

主な著作

■『医は国境を越えて』石風社,1999.
■『辺境で診る辺境から見る』石風社, 2003.
■『医者、用水路を拓く－アフガンの大地から世界の虚構に挑む』石風社, 2007.

贈賞理由

中村哲氏は、パキスタンとアフガニスタンで、30 年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続けてきた。
現地での経験に基づく深い思索と発言・著作は、異文化の理解と尊重を求め、真の平和構築を目指す知的営為として、国際的に高く評価されている。
中村氏は、1946 年に福岡市に生まれ、1973 年に九州大学医学部を卒業後、国内の病院勤務を経て、1984 年にパキスタン北西辺境州の州都ペシャワールのミッション病院に赴任した。
以来、貧困層に多いハンセン病や腸管感染症などの治療に始まり、難民キャンプや山岳地域での診療へと活動を広げた（『医は国境を越えて』）。また今世紀に入って頻発する干ばつに対処するためにアフガニスタンで 1,600 本の井戸を掘り（『医者井戸を掘る』）、クナール川から全長 25.5 キロの灌漑用水路を建設し（『医者、用水路を拓く』）、現在では 15,000 ヘクタール余の農地を回復・開拓した。
用水路工事は雇用を生み、難民の帰還を促すとともに、農地の回復は彼らが農民として平和に暮らすことを可能とした。
その数は 50 万人を超える。
中村氏の活動は、ペシャワール会の現地代表として医療や国際協力の現場で自ら汗をかき率先垂範するだけにとどまらない。
そこでの体験に裏付けされたイスラームに関する理解や現代世界に対する洞察を、ペシャワール会の会報や新聞、雑誌等に発表し、平和的手段による社会改革を広く市民に訴え続けている（『辺境で診る辺境から見る』、『空爆と「復興」』、『丸腰のボランティア』）。10 冊を超える平易で読みやすい著書は、アフガニスタンの現状をふまえた比較文化論であり、現地の人々の立場に身を寄せ、もう一つの別の視点から世界を見ること、考えることへと読者を誘う。
異文化への深い理解をもとに、自文化の相対化や内省を伴いながら、より良い社会のあり方を模索するという知的営為は、国際協力の基本姿勢である。
現地の文化と人々を尊重することを最優先に続けられてきた中村氏の活動は、異文化理解と国際協力の理念の実践であり具現である。
文化の振興と相互理解および平和に貢献するために創設された福岡アジア文化賞の精神を、30 年にわたる活動で体現している中村哲氏は、まさに「福岡アジア文化賞－大賞」にふさわしい。

パキスタン・ペシャワールにて難民の診療を開始/1989年

医師としてパキスタンへ　医療活動に従事した日々

1946 年福岡市に生まれ、北九州市若松区や福岡県古賀市で育った中村哲さん。九州大学医学部を卒業後、国内の病院勤務を経て、パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールのミッション病院に赴任しました。

転機は、まだ日本の病院に勤務していた 1978 年、パキスタンとアフガニスタンをまたぐヒンズークシュ山脈への登山隊に医師として参加したときのこと。ヒンズークシュ山脈に生息する珍しい蝶への興味もあり登山隊に加わった中村さんでしたが、現地で目にしたのは山岳地帯に生きる人々の厳しい現実でした。

医師がいるという噂を聞きつけ、救いを求めてやってきた人々に対し、何もしてやれず、はがゆい思いをしたという中村さん。6 年後の 1984 年、パキスタンへの医師派遣の話が舞い込んだときは、妻と幼い子どもがいましたが、ペシャワールで医師として働くことを決意します。

赴任後は、貧困層に多いハンセン病や腸管感染症などの治療にあたる傍ら、難民キャンプや山岳地域でのアフガン難民の一般診療にも従事。1986 年からは、アフガン難民への診療を本格的に開始します。

1991 年には、ダラエヌール（アフガニスタンの東部山岳地帯）に最初の診療所を開設し、1998 年には恒久的な基地病院として PMS（ペシャワール会医療サービス）病院をペシャワールに建設。以来、東部山岳部の 3 診療所を中心に、山岳無医村での医療活動を行ってきました。

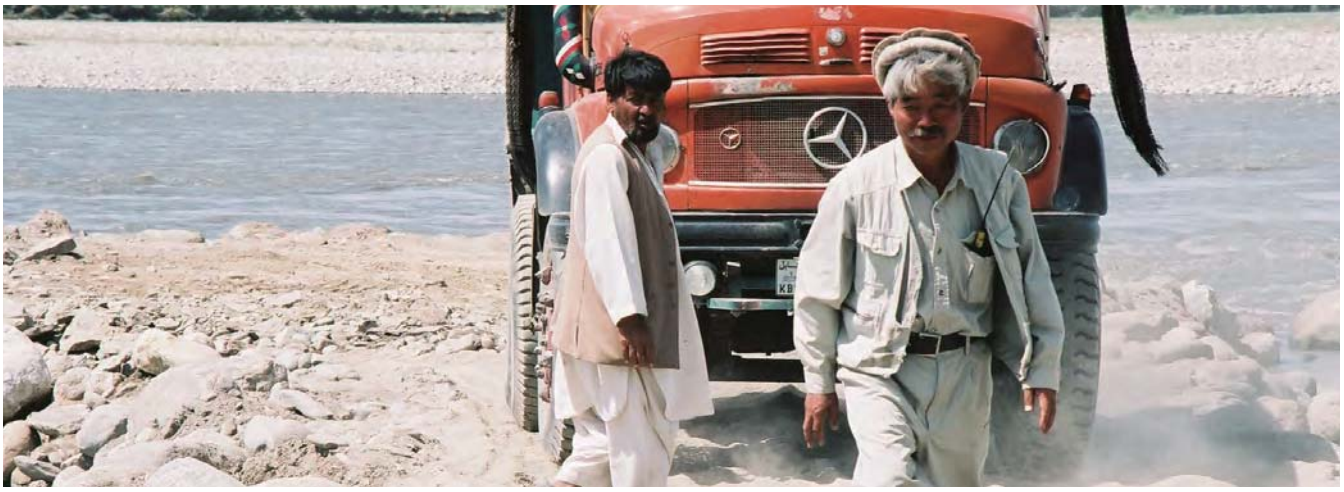
中村さんが赴任した頃のアフガニスタンは、政府に対する武装蜂起、他国による軍事介入、内戦という、極めて混乱した時代でした。それは、とりもなおさず、そこに生活している普通の人々の苦難に他なりません。彼らは、紛争により土地を奪われ、難民キャンプや山岳地域へ逃れるしかありませんでした。

そんな人々の目線に立ち、治療に従事していた中村さんでしたが、パキスタン政府からは事実上の診療所閉鎖要求を受けたり、用水路工事など医療以外の仕事が増えたことによる、医療職の人材流出など、その道のりは苦難の連続でした。

紛争により診療所が閉鎖へと追い込まれながらも、延べ 73,000 人を診療し続けた中村さん。現在は、軸を医療から灌漑事業などに移していますが、地元団体に譲渡された PMS 病院では、今もなお多くの患者を治療しているだけでなく、女性を含めた現地スタッフの医療教育にも重点を置いた活動を行っています。

前列左が中村さん

＜参考＞
ペシャワール会 HP
モンベル・チャレンジアワード HP
九州医療情報 HP



干ばつとの闘い　100 の診療所より 1 本の用水路を

長年にわたり、現地で医療活動を続けてきた中村さんですが、医療だけでは人の命を救うことはできないという思いが徐々に強くなっていきます。

きっかけは、2000 年にアフガニスタンを襲った大干ばつでした。

紛争のイメージが強いアフガニスタンですが、そもそもは、人口の 8 割以上を農民が占めるという伝統的な農業国。そこに大干ばつが襲いかかることで、豊かな穀倉地帯がことごとく砂漠化し、大規模な飢饉が発生。多くの人が飢餓に陥りました。数千万人が土地を追われ、餓死も数百万人にものぼると言われています。

水がないと穀物が育たない、食べるものがない人々は、砂漠化した土地を捨て、新天地を求めてさまよう･･･そうして、村が丸ごとなくなってしまうこともあったといいます。

栄養失調に加え、汚い水を飲み、赤痢で亡くなる人々も大勢いました。幼い子どもたちの命を次々と奪っていく大干ばつに、なす術なく立ちつくす医療者たち。きれいな水と食べ物さえあれば、多くの人は死ななくて済んだのにという思いが溢れてきました。

薬があっても、すべての人に与えることはできない、ましてや、それで飢えや乾きを癒すことはできません。ここでは、医療よりも、清潔な水と食べ物の確保が何よりも重要だという信念にたどり着いた中村さんは、PMS 病院付近の井戸掘りを中心に新たな活動を始めます。

パワーショベルを操縦する中村さん

「100 の診療所より 1 本の用水路」

2000 年 5 月に初めて井戸堀りに挑み、最初の水が出るまで 1 ヶ月かかったといいます。当初は、イランのカナート（湧水を利用する方法）を参考に、地下水の利用を考え、飲料用井戸約 1,600 本と直径約 5mの灌漑用井戸 13 本を掘削、カレーズ（伝統的な地下水路）38 ヶ所の修復を行いました。

次に、山から流れてくる水にも着目。中村さんを含め、みなが素人のなか、様々なことを見よう見まねで学びつつ、2003 年には、水量の豊富なクナール川の水を引き込む、全長 25.5 キロの農業用水路（マルワリード用水路）の建設にも取り掛かります。

7 年後に完成したその用水路によって復興した田畑は 3,000 ヘクタール。およそ 15 万人の生存を確保することが出来ました。工事には連日 500 人ほどの作業員が従事したので、7 年間で 70 万人の雇用が発生したことになります。用水路工事により、安定した水の確保だけにとどまらず、人々の定着、地域の治安安定にも寄与したのです。

現地では、コンクリートなどの建材や重機がなかなか手に入らず苦戦していた中村さんが、参考にしたのが、福岡県朝倉市にある「山田堰」。「山田堰」は、江戸時代に作られた筑後川にある用水路で、数百年以上たった今もなお、その地を潤し続けています。

「山田堰」を参考にしたのは、その場限りの治水工事を目的としていないから。重機が容易に手に入らないアフガニスタンの地で、コンクリートや鉄筋に頼る近代工法ではなく、「蛇籠（じゃかご）工」「柳枝（りゅうし）工」などの日本伝統の治水技術を利用することで、現地の人々が自力で修復しやすく、また他の地域でも同じように用水路をつくることができるようにしたのです。

「現地の人々は将来の自立を見据え、協力し合って用水路を守る態勢を整えつつある。我々の活動が残したものは生き続けてほしい」と中村さんは言います。

蛇籠（じゃかご）

わずか 3 年で、水と緑あふれる土地に！

2009 年 7 月

↓

2009 年 8 月

→

2012 年 4 月

6 年前の同じ場所

ジャリババ用水路（2009 年）

緑の大地計画　大詰めを迎える農村復活事業

ペシャワール会の活動のひとつで、医療事業、灌漑事業に続き、力を入れているもうひとつの柱が、農業事業です。

全長 25.5 キロにもおよぶ用水路の工事は雇用を生み、その完成とともに、水が戻り、緑が芽吹いた大地。戻ってきた人々にとって、次に必要なのは、そこで生きていく為に必要な食べ物を自給自足し、彼らが農民として平和に暮らすことができる故郷をつくることでした。

そこで、2002 年、灌漑事業と平行して、長期的な農村復興計画「緑の大地計画」を策定します。それに基づき、自給自足を目指す農村の復興に向けた本格的な支援を始めました。そこには現地の人々の暮らしに不可欠であるモスクや住居、また地域の核となる学校の建設も入っています。

中村さんはこう言います。「土壌があってこそ、初めて平和に暮らしていけるのです。家族がお腹いっぱい食べることができる、そして故郷に安心して住むことができることこそが、平和なのです」と。

今では、子どもたちが学校で勉強し、畑ではにんじん、ジャガイモ、大根、かぶ、ほうれん草などが収穫できるようになったといいます。

中村さんが長年かけて築いた用水路に沿って、水が流れ、大地が潤い、人々が戻り、村が再建される・・・完成した用水路の最終地点に新たな村ができる頃には、アフガニスタンは緑の大地で覆われているかもしれません。

荒涼とした砂漠が続くスランプール平野（2003 年）

“クナール川流域に広がるスランプール盆地”
ヤナギ、クワ、オリーブなどの緑が広がります

乾いた大地に水が流れ、水辺には緑が生い茂ります。耕作ができるようになった土地には人々が戻り、畑が再建されました。そうしてひとつずつ、村が再建されています。

わずか10年
たらずで

水が通り、緑が戻ったスランプール平野（2012 年）

カリフラワー農場

農作業する地元の農民たち

2013年（第24回）福岡アジア文化賞 大賞受賞者

中村　哲

NAKAMURA Tetsu

日本／異文化理解・国際（民際）協力

市民フォーラム

アフガニスタンに生命（いのち）の水を　～国際医療協力の30年～

■開催日／2013年9月14日（土）13：00～15：00■会　場／アクロス福岡地下2Ｆイベントホール・市役所15階講堂■参加者／700人

温暖化の進行は他人事ではない
問い直せ、人間と自然の関係

＜第一部　基調講演＞

アフガニスタンには「金がなくても生きていけるが、雪がなければ生きていけない」ということわざがあります。同国は農業国であり、雪解け水が恵みをもたらしてきたからです。多民族国家であり、部族ごとの自治性と割拠性が強く、中央からの指示が届きにくい風土であり、また貧富の格差は甚大です。1984 年、ペシャワール会はパキスタンでハンセン病治療の活動を開始。言葉も宗教も習慣も違う土地で、患者の気持ちを理解することは生やさしいことではありませんでした。外国人が陥りやすい過ちは、自分たちに馴染みのないものに対して、単なる文化の違いなのに優劣や善悪で捉えてしまうことです。私たちは宗教も含めて現地の文化慣習を、そのまま受け入れることを鉄則としていました。

1979 年のアフガン戦争で侵入したソ連軍が撤兵後、91 年に湾岸戦争が勃発し、あらゆる国際団体が撤退します。私たちの活動は 15 年を経過し、自前の組織と病院を建設・維持し、日本からの補給があれば、診療を続けられる体制を確立。96 年タリバン政権復帰後、大幅に治安が改善され、私たちも武装なしでの移動が可能になりました。ところが、2000 年春に世紀の大干ばつが発生。1,200 万人が被災し、500 万人が飢餓線上、100 万人が餓死線上に置かれました。飢えや乾きは薬や医療技術では治せず、無力感に捕らわれました。そこで飲料水源を確保するため 1,600 本の井戸を掘り進めました。

しかし、2001 年ニューヨークでの同時多発テロの翌日、ブッシュ米大統領はアフガニスタン空爆を宣言。空爆下、私たちは首都の 20 数万人の避難民に 1,800 トンの小麦粉と食用油を配給しました。こうした活動は、同胞のためなら命も惜しまない勇敢なアフガニスタン人によって支えられています。その後、タリバン政権が倒れて米軍が進駐すると、ケシ栽培が再び盛大に復活し、数年で世界の 93％を産出する麻薬立国となりました。

大干ばつは温暖化とともに現在も進行中であり、決して他人事ではありません。農業用水の確保のため、診療所より用水路建設を優先して着手しましたが、現地の人々が資金をかけずに維持できるかたちでないといけません。アフガニスタンと日本は取水技術に似たところがあると気づき、約 220 年前に完成した筑後川の山田堰の斜め堰や、竹カゴに石を詰めて護岸に使う蛇カゴの技術を活用。数年間で田園が復活しはじめました。現地の農民の願いは、ただ２つだけ。三度のご飯が食べられることと、自分の故郷で家族と平和に暮らすことです。35年間、戦争と飢餓に苦しめられてきたのに、みんな暗い顔をしていません。どうかすると、我々の方が暗い顔です。金まわりがよくなれば幸せになる、武器さえあれば自分たちの身は守られる、という迷信もやがて崩れるでしょう。

いま問い直すべきことは、人間と自然の関係ではないでしょうか。

学　校　訪　問

■実施日／2013年　9月2日　（月）11：10～16：35 ■会　場／筑紫女学園中学校及び高等学校　講堂

■実施日／2013年　9月11日（水）10：00～11：40 ■会　場／西南学院高等学校　体育館

■実施日／2013年　9月13日（金）14：40～17：00 ■会　場／福岡県立福岡高等学校　体育館

県立福岡高校

筑紫女学園中学・高校

県立福岡高校

西南学院高校

３つの学校を訪問し、4,500人を超える生徒に語りかけた中村氏。講演では、世界中が画一化の方向に向かっていることに警鐘を鳴らし、多様性を認める気持ちの大切さを訴えました。また、アフガニスタンの干ばつの状況を説明しながら、水の問題は自然と人間の関係で生まれる問題であり、アフガニスタンで起こっていることは、日本でも起きる可能性があると指摘しました。また、用水路が全線開通したとき、これで生きていけると農民たちが大喜びしたエピソードを紹介。「苦難続きなのに現地の人々は暗い顔を見せず、むしろ、日本人のほうが暗い顔をしている。人間は金や地位や仕事や娯楽・・・持てば持つほど暗くなるのかもしれない。都市空間は、人間が何でも意のままにできると錯覚させる。人間と自然の関係を真剣に見つめ、根本的な生き方を問い直す時期が迫っているのではないか」と、生徒たちに問いかけました。

筑紫女学園高校では「やりたいと思ったことを成し遂げるために必要なものは」という生徒の質問に「決して根性とか信念ではない。それよりも、人を許し、受け入れ、愛する気持ちです」と答えました。

西南学院高校では、「現地の人とのコミュニケーションで苦労したことは」との質問に「言葉や習慣、宗教が違うため、とにかく誤解の連続。しかし、一緒に仕事をすることで、お互いに分かち合える何かがあるはずと信じることでした」と力を込めて答えました。

中村氏が１７回生である福岡高校では、後輩たちから進路に関する相談を持ちかけられ、「医者を目指す者にとって大切なものは」という生徒の質問に「医者は技術者であってはならない。一見医療とは関係のないような医学以外のものも知っておかなくてはならない」と諭しました。

次代を担う若者の視野を広げることにもつながった講演会でした。

2013年（第24回）福岡アジア文化賞　大　賞

人も自然の一部。自然と人、人と人とが和する道を探る。

中村　哲

福岡アジア文化賞を授与される栄誉に、感謝と喜びを申し上げます。アフガニスタンは過去 35 年間、戦乱と外国の干渉に悩まされ、大規模な干ばつと洪水のため、人々は生存する空間を失いつつあります。温暖化による気候変化の影響は甚大であり、かつての農業立国の食料自給率は半減し、ひん死の状態だと言えます。私たちは医療団体ですが、国際支援では水の欠乏は重視されなかったため、自ら飲料水源の確保、水利・取水設備の充実に力を入れてきました。現在、私たちは 16, 500ha の面積に 65 万人の農民が生きていく空間を確保する、一つの復興モデルを完成しようとしています。

戦争は絶対に解決になりません。軍事干渉は事態を一層悪くしてきました。これはアフガニスタンだけの問題ではなく、国際社会の暴力化、多様性を許さない画一化の中でアジア全体が貧困にあえいでいます。食糧不足だけではなく、伝統文化や故郷、人間の誇り、そして和を失い、経済発展のためなら手段を選ばぬ「精神と道義の貧困」がまん延しています。自然を思いのまま操作できるという錯覚は、世界に致命的な荒廃をもたらします。

自然から遊離するバベルの塔はやがて倒れるでしょう。人も自然の一部。あらゆる人の営みが、自然と人、人と人とが和する道を探る以外、生き延びる道はありません。

今回、過去の受賞者たちの主張を見て、驚くほど共感できるものが多く、自分は決して孤立してはいないことを知り、大きな励みとなりました。この声がやがて大きな潮流となることを祈ります。

福岡アジア文化賞とは

～福岡アジア文化賞の趣旨～

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990 年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、アジアのほぼ全域にわたり、多くの素晴らしい受賞者の功績を顕彰しています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

賞の内容

大　賞

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体を対象としています。

学術研究賞

人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

芸術・文化賞

アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

運営

福岡アジア文化賞委員会〔事務局：福岡市総務企画局国際部アジア連携課〕

主催

福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団

福岡アジア文化賞ホームページ
http://fukuoka-prize.org/

本資料は、第 24 回福岡アジア文化賞報告書及び福岡アジア文化賞ホームページの記事を元に作成しています。